

# 仮名本『曾我物語』と金沢文庫の唱導資料に共通する説話（二）

——高僧刎頸説話の諸相——

湯 谷 祐 三

一、仮名本『曾我物語』の高僧刎頸説話

二、『宝物集』の高僧刎頸説話

三、『太平記』と『三国伝記』の高僧刎頸説話

四、『賢愚経』の刎頸説話

五、『西陽雜俎』の高僧刎頸説話

六、唱導資料と高僧刎頸説話

碁に夢中になっていた国王が、高僧の来訪を告げる臣下に対し、碁の局面に応じて、「切れ」と言葉を発し、それを高僧への処置と勘違いした臣下により、高僧は理不尽にも処刑されてしまう。

この説話は、仮名本『曾我物語』巻二を初め、『宝物集』『太平記』『三国伝記』等の中世文学に散見するもので、『賢愚経』に源泉が求められていた。しかし、その本文を比較検討した結果、これまで詳しく検討されていなかった『西陽雜俎』所収の説話こそが、日本の説話の直接の源流に位置づけられるものであろうことを論じ、さらに、類似した表現を持つ仮名本『曾我物語』と『宝物集』の間に、金沢文庫蔵の唱導資料のごとき文献の介在を推定した。

曾我兄弟の祖父である伊東次郎助親入道は、平家の咎めを恐れて、娘のもとへ通う頼朝を忌み嫌い、あまつさえ、二人の間に出来た自分の孫千鶴を「柴漬」にして殺害した。さらに、平家打倒を掲げて蜂起した頼朝に敵対し、遂に捕らえられて婿の三浦介義澄に預けられる。その後、『吾妻鏡』寿永元年二月十四日条や真字本『曾我物語』巻第三によれば、伊東入道は自ら自害したことになっているが、仮名本『曾我物語』巻第二では、太山寺本や古活字本など、伊東入道はこの世に恨みを残して処刑されたとされる。<sup>(1)</sup>

さて、不忠をふるまひし伊東入道は、いけどられて、鐔の三浦介義澄にあづけられけるを、前日の罪科のがれがたくして、めしいだし、よろいするといふ所にて、首をはねられける。最後の十念にもおぼず、西方淨土をもねがはず、先祖相伝の所領、伊東・河津の方をみやりて、執心ふかげに思ひやるこそ、無慙なれ。

さて、この段に続いて、真字本や太山寺本には見られぬ二つの説話が仮名本諸本にある。即ち「勤操僧正事」と題する一段は、南都の勤操が雨乞いの祈禱をしたところ、小

龍が自らの蛇身を脱するため命を捨てて菩提を祈り、雨を降らせたという説話で、『雑談集』巻九にも類話がある。

これは臨終時に十念を唱えることも無く、恨みを含んだまま事切れた助親入道の死に様の無惨さを、菩提を求めた小龍と対比させて際立たせる意図がある。

この説話に続けて、「総じて頼朝に敵したる物こそおほき中に、まのあたりに誅せられける、因果のがれざる理を思へば」として、以下の説話を記す。

昔、天竺に大王有、たつとき上人を帰依せんとて、国々をたづねけるに、ある時、いみじき上人ありとて、むかひをつかはしたまふに、此王、朝夕、碁をこのみ給ひて、人をあつめてうちたまふ。「上人まいり給ひぬ」と申ければ、碁にきりてしかるべき所有けるを、「きれ」とのたまひけるに、この上人の首をきれとの宣旨ときゝなして、すなわち聖の首をうちきりぬ・大王、夢にもしりたまはで、碁うちはてて、「その上人、こなたえ」との給ふ。「宣旨にまかせて、きりたり」と申。大王、大きになしきみ、仏になげきたまふ時、仏のたまはく、「昔、国王は、蛙にて、土中にありし也。上人、もとは田をつくる農人なり。しかる間、田をかへすとて、心ならず、唐鋤にて、蛙の首をすきき

りぬ。その因果のがれずして、きられけり。因果は、かやうなるものをや」とのたまへば、国王、未来の因果をかなしみて、をくの心ざしをつくして、かの苦をまぬかれたまひけるとかや。人は、たゞむくひをしるべきなり。

碁に夢中になつていた国王は、高僧がやつて来たという知らせにも注意を払わず、碁の局面に應じて「切れ」と言葉を発した。臣下は高僧の首を切れという命令だと判断し僧を殺す。碁を終えて僧に謁見しようとした王は、僧の処刑を聞いて嘆き悲しみ、仏所に赴く。仏は、前世で国王は田の中の蛙であり、農夫であつた上人に鋤で首を切られて死んだという因縁を明かした。そして「人は、たゞむくひをしるべきなり」と結び、ある行為にはそれに応じた結果が後に必ずあることを自覚せよと教訓している。

たとへ故意ではなく不注意の結果であつたとしても、物の命を奪つた行為により、生まれ変わつて後、その報いを受け、僧は理不尽な最後を遂げる。『曾我物語』に即して考えれば、況や伊東次郎助親入道は、わが娘が頼朝との間に儲けた千鶴を意図的に殺害している。今無惨にも伊東入道が刑死することとなつたのは、まさにその行為の報いによるものであり、この説話をふまえれば、むしろ当然の末

路である、物語の編者は主張しているかのごとく読みとれるのである。

ただ、仮名本では現世での殺生の報いを現世で受けるという形であるが、引用された説話では、過去世での殺生の報いを現世で受けるという設定となっており、その点では相違している。なお、本文については、仮名本『曾我物語』の他の諸本も古活字本と同様で大きな異同はない。<sup>②</sup>

## 二

さて、この説話は鎌倉期の説話集『宝物集』に収められていた。その中で、この説話は五戒の内の殺生戒を保つことを勧める部分で引用されている。次に『宝物集』（第二種七卷本）巻第五の本文を示す。<sup>③</sup>

昔、天竺の国王、行業たつとき羅漢をきゑせんがためにむかへ給ふ。そのほど、囲碁をうちてまち給ふに、羅漢まいりたるよしを奏しけるに、囲碁にきるべき所のありけるに、興に入て、「きれ」とのたまひけるを、羅漢をのたまふなめりとて、羅漢の首をきりつ。国王碁をうちはてて、「羅漢こなたへ」とよびたまふに、「はやく、きれと侍りつれば、きり侍りぬ」と申ければ、心うくあさましくおぼえぬ。仏在世の事なりけれ

ば、仏の御もとにまうでて、事のありさまを申給ひければ、仏、国王につけてのたまはく、「昔、国王は蛙にて、田の中におはしき。羅漢は田をつくる農夫なりき。田をつくるほどに、鋤といふ物をもて、心ならず、蛙の首をうちきりてき。農夫くゆれ共かひなくてやみぬ。今、その業をつぐのはんがために、心ならずころさるゝなり。」〔心ヲラコシテ死セバ、心ヲラコシテ死サル。心ナラズ死セバ、心ナラズ死サル、ナリ。〕無始生死より、諸仏の出世の利益に漏れて六趣に輪廻してかなしむは、殺生戒をたもたざるがゆへなり」とぞのたまふ。

傍線部「心ヲラコシテ死セバ、心ヲラコシテ死サル。心ナラズ死セバ、心ナラズ死サル、ナリ。」の一文は、新大系本の脚注によれば、「底・瑞・九本なし、久本により補入」とある通り、底本たる吉川泰雄氏蔵本や瑞光寺蔵本、九冊本等に無く、身延山久遠寺蔵本により補われたものであるが、故意に殺せば故意に殺され、不注意で殺せば不注意に殺されるという内容はまさに、前章で見た『曾我物語』の伊東入道の刑死の場面及びその後に置かれた「因果のがれざる理」を主題とする説話と重なりあう。

『宝物集』の他の諸本では、この部分は次のようになつ

ている。

物ノ報ト云事ハ、心ヲ起シテ殺サハ、心ヲ起シテ殺サル、也。心ナラズ殺セバ、心ナラズ殺サル、也。

（元禄六年刊本、大日本仏教全書所収）

物報ト云事ハ、心ヲ起シテ殺サバ、心ヲ起シテ殺サル、也。心ナラズ殺セバ、心ナラズ殺サル、也。

（片仮名古活字三卷本<sup>(4)</sup>）

あやまちさへかくのごとし。いはんや、こゝろとして、ころさんむくひにおゐてをや。

（平仮名古活字三卷本<sup>(5)</sup>）

あやまちさへかくのごとし。いはんやこゝろをおこしてころさんむくひにをひておや

（二卷本<sup>(6)</sup>）

平仮名古活字三卷本の「あやまちさへかくのごとし。いはんや」の一文を考慮すると、『曾我物語』の文脈は更にわかりやすく、意図的でなく「あやまち」で蛙を殺した高僧でさえ、その過去世の報いを現世で受けて思いがけず横死した。況や、流人頼朝との関係を絶つべく千鶴を惨殺した伊東入道が、頼朝の決起により処刑の憂き目を見たのは当然の報いなのであるという論理が、「人はただむくひを知るべきなり」の背後に読みとれる。

ところで、この『宝物集』と仮名本『曾我物語』との関係はどうであらうか。「上人」(『曾我物語』) — 「羅漢」(『宝物集』)、「唐鋤」(『曾我物語』) — 「鉄」(『宝物集』)などの相違があるから、直接の引用関係ではなからうが、話の展開はもとより同文的に一致する部分も多く、仮名本のおもとに『宝物集』があるとの推定は許されるであらう。

仮名本『曾我物語』と『宝物集』の関係について、小泉弘氏は、「単に挿入独立説話だけにとどまらず、『曾我物語』の全巻にわたって、詩句・經典・故事等の引用も多数存在する」と述べられ、利用された『宝物集』の系統については、「流布本『曾我物語』作者の用いた『宝物集』は第一種七卷本系に属するもの(元禄六年刊の七卷本系)」との結論を出しておられる。

しかし、本稿で取り上げた説話に限ってみても、前記のごとく、ポイントとなる名詞が異なるなど、仮名本の編者が『宝物集』を座右に於いて逐一参照したと断定するには、猶不安を覚える点がなきにしもあらずである。

### 三

さらにこの説話は『太平記』巻第二にも引用されるところであった。『太平記』では、倒幕の謀議に荷担した容疑で拘束され、鎌倉へ護送された忠円・文観・円観の三人の

高僧に対し、遠流・左遷とそれぞれの刑が決まったところで、この説話が使われている。慶長八年刊古活字本に拠れば次の通りである。

時ノ天災ヲバ、大権ノ聖者モ遁レ給ハザルニヤ。昔天竺ノ波羅奈国ニ、戒定慧ノ三字ヲ兼備シ給ヘル独ノ沙門ヲハシケリ。一朝ノ国師トシテ四海ノ倚頼タリシカバ、天下ノ人帰依渴仰セル事、恰大聖世尊ノ出世成道ノ如也。或時其国ノ大王法会ヲ行フベキ事有テ説戒ノ導師ニ此沙門ヲゾ請セラレケル。沙門則勅命ニ随テ鳳闕ニ参ゼラル。帝折節基ヲ被遊ケル砌へ、伝奏参テ、沙門参内ノ由ヲ奏シ申ケルヲ、遊シケル基ニ御心ヲ入ラレテ、是ヲ聞食レズ、基ノ手ニ付テ、「截レ。」ト仰ラレケルヲ、伝奏聞誤リテ、此沙門ヲ刎トノ勅定ゾト心得テ、禁門ノ外ニ出シ、則沙門ノ首ヲ刎テケリ。帝基ヲアソバシハテ、沙門ヲ御前ヘ召ケレバ、典獄ノ官、「勅定ニ随テ首ヲ刎タリ。」ト申ス。帝大ニ逆鱗アリテ、「行死定テ後三奏ス」ト云ヘリ。而ヲ一言ノ下ニ誤ラ行テ、朕ガ不徳ヲカサヌ。罪大逆ニ同ジ。」トテ、則伝奏ヲ召出シテ三族ノ罪に行レケリ。サテ此沙門罪ナクシテ死刑ニ逢ヒ給タル事只事ニアラズ、前生ノ宿業ニテヲハスラント思食レケレバ、帝其故ヲ阿

羅漢二問給フ。阿羅漢七日が間、定ニ入テ宿命通ヲ得テ過現ヲ見給フニ、沙門ノ前生ハ耕作ヲ業トスル田夫也。帝ノ前生ハ水ニスム蛙ニテゾ有ケル。此田夫鋤ヲ取テ春ノ山田ヲカヘシケル時、誤テ鋤ノサキニテ、蛙ノ頸ヲ切タリケル。此因果ニ依テ、田夫ハ沙門ト生レ、蛙ハ波羅奈國ノ大王ト生レ、誤テ又死罪ヲ行レケルコソ哀ナレ。サレバ此上人モ、何ナル修因感果ノ理ニ依カ、卦ル不慮ノ罪ニ沈給ヌラント、不思議也シ事共也。

円觀ら三人の遠流は、幕府調伏の法を行っていたことが証明されたことによるもので、末尾にいうが如き「不慮ノ罪」ではないのであるが、『太平記』編者はそうした現在の彼らの行動を、この度の受刑の原因とは考えていないように、即ち倒幕活動は悪報を招くような原因ではないと見なししている節がある点興味深い。また、仮名本『曾我物語』では、報いを受けた伊東入道の千鶴殺害の罪は明らかにあるが、『太平記』では三人の高僧は少なくとも物語に描かれる範囲では殺生の罪は犯しておらず、よって「何ナル修因感果ノ理ニ依カ」との疑問が出るわけであるし、引用説話の趣旨によれば、三人の「天災」の原因を過去世に求めざるを得ない。ちなみにこの説話は、神宮徴古館本・

神田本・玄久本などの『太平記』の諸本に古活字本と同文で記載されているが、西源院本には全く見えない。

『太平記』に利用されたこの説話と仮名本『曾我物語』や『宝物集』のそれとを比較すると、話の大筋では一見類同するようであるが、使用される語句は、「説戒ノ導師」「鳳闕」「勅命」「伝奏」「勅定」「逆鱗」「典獄」「大逆」など、『曾我物語』や『宝物集』には見られない漢語を多用しており、説話の細部についても、『太平記』では伝奏の勘違いに激怒した国王が伝奏を「三族ノ罪」に行つたとし、僧の死を知つた国王が嘆き悲しんで仏所へ赴いたとする『曾我物語』や『宝物集』と異なる。

さらに『太平記』の設定では、伝奏の一族を殺す行為により、国王は更に殺生の罪を重ねることとなり、その業の連環を脱する方途は示されていない点、殺生の罪を戒める『宝物集』の説話や、国王が「未来の因果をかなしみてをくくの心ざしをつくしてかの苦をまぬかれ」たとする仮名本『曾我物語』とは異なつた文脈となる。

また、国王が僧の横死の原因を尋ねる相手にしても、他の二者が仏とするに對し、『太平記』では阿羅漢に相談していて、総じて、『宝物集』のごとき説話からの乖離度は大きく、『太平記』編者が『宝物集』などを直接利用して、当該説話を本編に組み込んだとは考えにくいのである。

なお、『太平記』の中の「行死定テ後三奏ス」という国王の言葉は、『貞観政要』に由来し我が国の「獄令」にもあり、『明文抄』にも引かれること、岡見正雄氏の詳注がある。

その構成や収録説話が『太平記』と密接な関係にあると考えられる『三国伝記』にも、この説話が見える。巻第十一の第一話「波羅奈国比丘ノ事」がそれで、題名の下に「因果難遁事」と注記がある。

## 第一、波羅奈国比丘ノ事 因果難遁事

梵曰、昔、波羅奈国ニ戒定慧ノ三学兼備シ、身口意ノ三業ヲ通達セル沙門有リ。一朝ノ国師、四海ノ倚頼タリ。代々ノ明王同ク帰依ヲ致シ、世々ノ賢相悉ク渴仰ヲ尽シ給フコト、大聖釈迦ノ如シ。所以ニ屢紫闥ノ中ニ出入シ、常ニ金星ノ下ニ徘徊セリ。或ル時、法会ヲ行フベキ事有テ、先ヅ説戒ノ導師ニ此ノ沙門ヲ請給。勅命ニ随ヒ鳳闕ニ参ズ。王折節甚ヲ打給フ砌へ、伝奏沙門参内ノ由ヲ申シケルヲ、帝甚ニ御意入ニ付、甚ノ手ニ、「截レ」ト仰ラレケルヲ、伝奏聞誤テ、「截レ」ト勅定也ト心得テ、禁門ノ外へ出シ、則チ沙門ノ頸ヲ切ニケリ。帝其ノ後沙門ヲ召ケルニ、典獄ノ官、「勅定ニ随テ首ヲ刎ネツ」ト奏ス。大ニ逆鱗有テ、「死ヲ

行フコト定テ後三タビ奏ス」ト云ヘリ。爾ニ、一言ノ下タニ誤リヲ行テ、朕ガ不徳ヲ顯スコト、甚ダ大逆ノ臣也」ト怒給ヘドモ甲斐無シ。御ン歎ノ余、阿羅漢ニ問玉フ。羅漢七日ノ間定ニ入り、宿命通ヲ得テ、彼ノ過現ヲ見玉フニ、「此ノ沙門前生ハ耕作ヲ業トスル田夫也。帝ノ前生ハ水ニ栖ム蛙ニテ有キ。其ノ田夫春ノ荒小田ヲ耕ケル時キ、誤テ鋤ノサキニテ切タリ。然ニ、田夫ハ今ノ沙門ト生レ、蛙ハ波羅奈国ノ大王ト生タリ。彼ノ因果ニ依テ此ノ報ヲ感ズ」ト奏シケリ。其ノ後、帝深ク殺生ヲ禁断有リケリト云。

全体的に『太平記』と細かい語句のレベルまで一致し、両者に何らかの関係があることは間違いない。成立時期から見て、『太平記』が『三国伝記』に先行して成立していることは動かず、すると点線部などの『太平記』に見られない文章などは、典拠に対句仕立ての美辞麗句を附加する傾向にある『三国伝記』編者の増補と考えてよからう。無視し得ないのは実線部の相違で、『太平記』では国王の言葉を誤解して高僧を処刑した伝奏を、国王は「三族ノ刑」に処しているが、『三国伝記』では「怒給ヘドモ甲斐無シ」として、国王はそれ以上の罪を犯していない。さらに、末尾には「深ク殺生ヲ禁断有リケリ」とあり、かえつ

て『宝物集』や仮名本『曾我物語』の文脈に近づいていることがわかる。

『三国伝記』では、この次の第二話「為秦安義造普賢事」の題名の下に「殺生罪除事」とあり、「三話一類様式」を当てはめるならば、殺生の罪による因果とその懺悔滅罪が第一話から第三話までの主題と見られる。よつて、『太平記』のままで国王が殺生をくり返しており、その回心は定かでなく、懺悔の要素が見られないため適当ではないのである。

これをもつてしても、『三国伝記』が『太平記』を撰取するにあたり、自己の作品構成の論理に随つて典拠を適宜改編して取り込んでいることがわかる。

#### 四

『太平記』のこの説話の淵源について、『太平記抄』以来諸家の指摘するところでは、『賢愚経』巻第四の曇摩苾提の因縁（大正藏卷四・三七九頁）が挙げられている。国訳一切経所収本によりその本文を示す。

目連又言はく、過去世の時此の閻浮提一国王有り。名を曇摩苾提と曰ふ。へ秦に法増と言ふへ布施・持戒・聞法を好喜み慈悲の心有り。性暴悪ならず。物の命を

傷けず、王相を具ふ。正法によりて国を治むること二十年を満す。事閑暇を簡び人と共に博戯す。時に一人法を犯して人を殺すもの有り。諸臣、王に白さく、「外に、一人有り王法を犯す。云何が罪を治めむ」と。王、時に戯を慕ひ脱して之に答へて言く、「国法に随つて治せよ」と。即ち、限律を案ずるに「人を殺さば応に死すべし」と。尋いで此の人を殺す。王、博戯し已り諸臣に問ふて言く、「向の罪人今何の所に在る、我、断決せむと欲す」と。臣、王に白して言さく、「国法に随つて治す。今、已に殺し竟る」と。王、是の語を聞き悶絶し地に竟る。諸臣左右冷水にて面を灑ぐ。良久しくして乃ち蘇へり。泣を垂れて言く、「宮人・妓女・象・馬・七宝悉く此に於て住す。唯、我れ一人独り地獄の中諸の苦痛を受く。我、本末だ王と為らざるの時、而も此の宮中に亦王治有り。我久しからずして死すも、此の中亦当に續きて王治有るべし。我、名は王と為り而して人の命を害す。当に知るべし、便是れ梅陀羅の王なり。知らず、世々当に何の所に趣くべきか。我、今決定し王と為るべからず。即王の位を捨て山に入り自ら守らむ」と。時に王命終り大海の中に生じ、摩竭魚と作る。其の身長大にして七百由旬なり。諸王・大臣、自ら勢力を恃み枉げて百姓を尅し



人民を離別し衆生を剝脱し、命終りて多く摩竭大魚と作る。多く諸虫有りて其の身を啖身す。譬へば髡髡と茸とを拘執するが如く身に著く諸虫も亦復是の如し。

身癢痒するの故に頗梨山に揩ひて諸虫を碎殺す。血流れて海を汚し、百里皆赤し、此の罪の縁を以て是に於て命終りて大地獄に墮す。(へへは割注)

釈迦の高弟目連の伝える話として、曇摩苾提という善行を好み慈悲深い国王が、「博戯」中に奏上された殺人犯の罪科について、遊びに熱中するあまり深く考えず「法に任せよ」と命じた結果、法律通り犯人は死罪となった。王はこの事を悔い、王位を捨てる決意をして、その死後、巨大な「摩竭魚」となる。しかし、大魚の身体には多くの虫が吸い付いており痒み甚だしく、それを搔くために「頗梨山」に身を擦りつけた所、多くの虫が死に、血が流れて海を汚した、その罪により、さらに地獄へ墮ちてゆくという因縁である。

仮名本『曾我物語』や『宝物集』『三国伝記』等の現行の注釈書においても、当該説話の源流として提出される経典ではあるが、改めて本文を比較すると日本の説話との距離はかなり離れているように思われる。

まず、日本の説話では、王が囲碁に氣を取られ不用意な

発言をしたために徳高い高僧が不慮の刑死を遂げるのであるが、『賢愚経』では、王が「博戯」に夢中になっていたとは言え、「国法に随つて処理せよ」と命じており、この命令自体は特に非難されるべきものではないし、まして処刑されたのは無実の人間ではなく、国法によれば死刑と規定されている殺人犯であった。

よって、客観的には国王に糾弾されるべき落ち度は見あたらないが、しかし、慈悲深い国王自身が、自らの行為を深く後悔して王位を捨て魚となる。それでも猶、殺生の罪業はどこまでもその報いを求め、国王は魚の身においても殺生を重ねることとなり遂に墮地獄する。『賢愚経』によれば、国王がいだいた「殺生」という認識そのものが、殺生の報いを生ぜしめているかのごとき印象を与え、刑死した男と国王との過去世の因縁などは全く語られることもない。

これに対して日本の説話では、国王の不注意な態度や、それを誤解した伝奏の更なる悲劇的な間違いなどにより、高僧の理不尽な死が一層強調されることとなり、その理不尽さの理由としての「解き明かし」が、過去世の因縁譚という形で語られ、殺生の報いの逃れがたさが、経典よりもむしろ効果的に読み手に伝わるように思われる。もっとも、こうした「改変」が、日本古典の成立の場で成されたもの

と考えるのは速断に過ぎよう。

仏典中にはこの因縁の類話を他に見いだしておらず、『賢愚経』がしばしば題材として取り上げられる敦煌石窟の壁画にも、この因縁を描いたものはないようであるが、如上の様々な相違点があることから、日本の古典に収録されている説話と『賢愚経』所収の因縁とを短絡させて考えることはできないのである。

## 五

日本の古典作品におけるこの説話の典拠を考察する上で逸することのできないのは、古く岡田挺之の『乗穗録』(『日本随筆大成』第一期第二十所収)に指摘される『酉陽雜俎』続集巻第四「貶誤」の一条であろう。<sup>(1)</sup>

俗説、沙門杯渡入梁、武帝召之、方弈棋呼殺、闇者誤聴殺之。

浮休子云、梁有槪頭師、高行神異、武帝敬之、嘗令中使召至、陛奏槪頭師至、帝方棋、欲殺子一段、応声曰、「殺」。中使人抛出斬之。帝棋罷、命師人。中使曰「向者陛下令殺、已法之矣。師臨死云、『我無罪、前生為沙弥、誤鋤殺一蚓、帝時為蚓、今此報也。』」

俗説によると、沙門の杯渡は、梁に入つて、武帝(蕭

衍)が召見された。奕棋(囲碁)をしていたとき、「殺せ」と声を出した。警護の宦官は、それをききあやまり、沙門を殺してしまった。

だが、浮休子(張鷟)によると、梁に、槪頭師という高德の不思議な法師がいた。武帝は、法師を尊敬していた。かつて中使に命令して召し出し、陛に着いたので、槪頭師が参りましたと上奏した。帝は、そのとき、棋(碁)をうっていて子をひとつ殺すところであった。声に応じて、「殺せ」といった。中使は、いそいで出て、法師を斬つてしまった。帝は、棋がおわつて、法師に入れと命じた。中使は、「さきほど、陛下は殺せとおおせられましたので、もう執行いたしました」と答えたのである。法師は、死に臨んでいった。「わたしは、無罪だ。ただ、前生に沙弥であつたとき、誤つて鋤で蚓を一匹殺したことがある。帝は、そのとき蚓であつた。いま、その報いを受けたのだ」。

『酉陽雜俎』前集二十巻・続集十巻は、唐の段成式(？—八六三)の編著で、諸方面の怪異譚を豊富に収録したものである。提出話は二つの説話から成り、一つは「俗説」として、高僧杯渡が囲碁をしていた梁の武帝の不注意な一言により処刑される話。もう一つは、「浮休子云」として、

梁の高僧こそう楷頭師がやはり圀碁中の武帝の一言により刑死するもので、これには法師の末期の言葉が残され、それによれば、この不慮の災難は、前世で蚓であった武帝を法師が誤つて鋤で殺してしまつたことの報いだという。

前者の杯渡について、梁慧皎の『高僧伝』巻十の伝によれば、その事蹟には怪異なるものが多いが、武帝により処刑されたことは他に所伝を見ない。後者の「楷頭師」については伝記未詳。

後者の「浮休子」とは、『遊仙窟』の著者として知られる張鷟（字は文成、生没年未詳）の号で、玄宗の開元末年（七四一）頃まで在世したとされ、日本では『宝物集』などに則天武后との関係を匂わす典拠未詳の説話が載るなど、逸話の多い人物である。

その著とされる現行の『朝野僉載』全六巻には、張鷟没後の記事も含まれる事から、後人の補遺も含むと考えられているが、その巻第二に『西陽雜俎』が引く説話をほぼ同文で載せ、文末に「帝流涙悔恨亦無及焉」の一文がある。

梁の武帝蕭衍（四六四—五四九）は、儒仏老に詳しく多数の著作を残し、熱心な仏教信仰や草隸の書に通じていることでも知られる学問人で、圀碁を好み、自ら『碁評』一卷を著している。

さて『西陽雜俎』続集巻第四に記す二つの説話、特に後

者のそれと『宝物集』の説話を比較すると、話の展開の酷似に驚くのである。高僧が王に招かれて参内したところ、王は圀碁の最中で、王の「殺せ」（截れ）とのつぶやきを、僧を処刑せよとの命令であると臣下が誤解して処刑してしまふ。そして高僧の横死の原因は、前世で王が蚓（蛙）であつたのを高僧が誤つて鋤で殺したことにあるとする。

説話の骨格は両者全く同じと見てよく、その類似度の高さは先に見た『賢愚経』の比ではない。異なるのは、国王が高僧横死の原因を知る手段で、『西陽雜俎』（『朝野僉載』も同じ）では高僧自らが死ぬ前に前世の因縁を遺言したのに対し、『宝物集』では国王が仏所に赴いて仏より高僧と自分の前世での因縁を聞くという設定である。こうした話の改変は、仏教の殺生戒や因果応報思想をより鮮明にするために施されたものとおぼしく、場所も天竺に移されていることなどから、唐代中国の俗話を利用して、日本においてかかる仏教説話へと改変せられたものではないかと推定するのである。

## 六

仮名本『曾我物語』の「高僧刎頸説話」をめぐり、関連資料を通覧したわけであるが、最後にもう一つ、金沢文庫所蔵の唱導資料を紹介しておきたい。

前稿において筆者は、仮名本『曾我物語』巻第七に記される「今の慈恩寺」の縁起説話をめぐり、この説話が、通説に言われるような近江の慈恩寺ではなく、中国長安の慈恩寺に関する縁起であり、それは中国渡来の言説というよりも、朗詠などを通して中世の日本で生成流通した「中国説話」であることを論じた。さらに、悲母の慈愛を強調する慈恩寺の縁起譚が、亡母追善などを目的とする唱導の現場で実際に使用され、その時の言説が現存する事を、金沢文庫蔵の唱導資料を紹介して提示した。<sup>13)</sup>

前稿の注においても指摘したように、仮名本『曾我物語』と共通する金沢文庫の唱導資料は慈恩寺の縁起譚のみではなく、本稿で取り上げた「高僧刎頸説話」も亦、同文庫の唱導資料中に見いだされるものである。<sup>14)</sup>

金沢文庫蔵『大王不慮切羅漢頸事』(三〇九—五〇)

大王不慮切羅漢頸事／殺生戒可合事」(表紙)

昔天竺ニ大王有り。一人ノ羅漢僧ニ帰依ス。或時、此羅漢僧ヲ王宮ニ請入、而大王此時折シモ囲碁ニ打入給時ニ、羅漢僧案内之由奏」(表紙裏)聞ス。而囲碁ニ切ヘキ所之候ケルヲ、国王興ニ入、大声ニテ切レト言ケルヲ、羅漢参内之由奏聞スル臣下、羅漢之頸切レトノ玉フト意得テ、左右無ク行方ヘ具行テ忽頸ヲ切り了。

大王之ヲ知ラス、囲碁打ハテ、羅」(1オ)漢コナタヘト勅ラレテ、御対面有ント欲スル之処、臣下上件子細ヲ奏ス。大王手ヲ打、大ニ歎給。トカク云ニモ及ハス、歎悲給思ノ余リ、如來在世ノ事テ候ケレハ、大王仏前ニ詣テ、此事ヲ悲申玉フ。仏大王ニ告、是ハ昔ノ業因業」(1ウ)果相也。力及ハス。大王、昔蛙ト云物テ田中ニ御キ。羅漢ハ其時耕ス農夫也。田ヲ作ル之間、鋤云物ヲモチ心ナラス、蛙頸打切テ農夫後悔レトモ甲斐無、今其業ヲ償テ、心ナラス此羅漢頸ヲ切也。業因業果ノ感應スル所」(2オ)皆以テ此ノ如シ。心ナラス之ヲ殺セハ、心ナラス殺サル。心ヲ発シテ之ヲ殺セハ、必又心ヲ発シテ殺サル。此ハ生死之常習、定ルル法式也云々。」(2ウ)

これを『宝物集』・仮名本『曾我物語』・『太平記』などと比較すると、一見して『宝物集』との同文的一致度が高く、本稿二章で検討した「心ヲヲコシテ死セバ云々」の一文も唱導資料には含まれる。さらに唱導資料にはその表紙に「殺生戒可合事」とあり、『宝物集』の当該説話記載の目的とも合致することから、この資料は殺生戒を説く目的で『宝物集』より抄出されたものに由来すると考えて大過なからう。

ただし、「歛」（宝物集）―「鋤」（唱導資料）となつて  
いることなどから、直接『宝物集』を参照したものと断  
定できず、『宝物集』には見られぬ唱導資料の傍線部の独  
自文「業因業果ノ感応スル所皆以テ此ノ如シ」が、仮名本  
『曾我物語』に「その因果のがれずして、きられけり。因  
果は、かやうなるものをや」として、意味的に類似する言  
説を見ることはなかなか興味深い。

前稿での検討においても、仮名本『曾我物語』と唱導資  
料の間に、直接の書承関係は考えられず、――前稿で扱っ  
た唱導資料は、今回の資料よりも美辞麗句に満ちた対句表  
現を多用し、語りの臨場感を髣髴とさせるものであった――  
今回も典拠関係を云々することはできないが、仮名本  
『曾我物語』が、どういった説話を本文に取り込むかにつ  
いては、実際の唱導の現場におけるその説話の使用の頻度  
なども、選択に影響を与えているのではないか、つまり、  
寺院の唱導活動を通して、ある程度よく知られた説話が、  
仮名本『曾我物語』などに採用されているのであり、使用  
される文脈についても、唱導の場においてその説話が担っ  
たであろう「目的」に沿った形で、仮名本の本文に組み込  
まれているように考えられる。

前述のごとく仮名本『曾我物語』の編者が、直接『宝物  
集』を参照したとするには不安な点もあり、両書の間に金

沢文庫の唱導資料のごとき文献を介在させて考えてみたい  
のである。

#### 注

- (1) 以下、仮名本『曾我物語』の引用にあたっては、十行古活  
字本を底本とする日本古典文学大系所収の市古貞次・大島建  
彦両氏校注『曾我物語』（昭和四一年、岩波書店）を用い、  
適宜他の諸本を参照する。
- (2) 南葵文庫本・万法寺本・東大本・彰考館本等を参照した。
- (3) 引用は新日本古典文学大系所収本（小泉弘・山田昭全両氏  
校注、一九九三年、岩波書店）を使用する。
- (4) 引用は山田昭全・大場朗・森晴彦各氏編『宝物集』（一九  
九五年、おうふう）による。
- (5) 引用は吉田幸一氏校『宝物集三卷本』（一九五三年、古典  
文庫第七七冊）による。
- (6) 築瀬一雄氏「校合二卷本宝物集」（碧冲洞叢書第三輯、昭  
和三六年）による。
- (7) 小泉弘氏「古鈔本宝物集研究篇」（貴重古典籍叢刊八、昭  
和四八年、角川書店）一四三頁による。
- (8) 引用は後藤丹治・釜田喜三郎両氏校注『太平記』（日本  
古典文学大系所収、昭和三五年、岩波書店）による。
- (9) 岡見正雄氏校注『太平記（一）』（角川文庫、昭和五〇年、  
角川書店）三二六頁。
- (10) 引用は池上洵一氏校注『三国伝記（下）』（昭和五八年、三  
弥井書店）により、一部表記を改めた。

(11) 『秉穗録』には、「曾我物語に、碁をうつことばによつて、

誤て僧を害せる事を載て、天竺の事とす。酉陽雜俎には、杯渡なりとし、又楳頭師とす。共に梁の武帝の時なり。」とある。近代において、この重要な指摘を継承したのは、後藤丹

治氏校注『太平記(一)』(日本古典全書、一九六一年、朝日新聞社)であった。その後、前掲注9岡見正雄氏校注『太平

記(一)』や、長谷川端氏校注・訳『太平記①』(新編日本古典文学全集所収、一九九四年、小学館)は後藤注の存在を示している。ただし、後藤氏も『秉穗録』の指摘を紹介するのみで、『酉陽雜俎』の本文自体は提示されていない。

原文の引用は、『酉陽雜俎』(子部刊要、民国七二年、漢京文化事業有限公司)による。訳文は、今村与志雄氏訳注『酉陽雜俎』四(東洋文庫、一九八一年、平凡社)一七九頁による。

(12) 村上美登志氏『中世文学の諸相とその時代』(平成八年、和泉書院)一一七頁等参照。なお村上氏は、仮名本『曾我物語』の「今の慈恩寺」を近江の慈恩寺に比定することにより、その創建年代から仮名本『曾我物語』の成立年代を推定されるに至っており、注意を要する。

(13) 拙稿「今の慈恩寺」考―仮名本『曾我物語』と金沢文庫の唱導資料に共通する説話―『名古屋大学国語国文』九一、平成一四年一二月。

(14) 以下、金沢文庫資料については、前掲拙稿に掲載した訓読文に拠る。